

「自然と労働」についての方法の問題

群馬県上野村をととして

Methodology of Study on "Nature and Labor"

内山 節

はじめに

- ①自然の無事
- ②共同体における交通と自然
- ③存在する共同体について
- ④共同体的交通の性格
- ⑤「仕事」と「稼ぎ」
- ⑥「広義の労働」と「狭義の労働」
- ⑦労働に対する「精神の習慣」
- ⑧まとめに代えて

【論文要旨】

日本の伝統的な考え方においては、自然は人間の外にある客観的な対象ではなく、自然と人間は相互に関係しあうものであった。人間の存在のなかに自然が入り込み、自然の活動のなかに人間が入り込むと考えられていた。

この関係を実現させるものとして、共同体社会があり、人間の労働があると人々は考えた。ゆえに労働は、生産的行為として考えられていただけでなく、人間の暮らしをつくり、共同体を守り、自然と関係する働きかけのすべてであると思われてきた。

本稿は、このような視点から、日本の歴史に影響を与えた“自然”と“労働”とは、どのようなものであったのかを明らかにする。その考察をととして、合理的な認識が可能なものと、非合理的なものを統一していく主体とは何かを、“技”、“慣習”、“記憶”、“物語”などのなかに発見していく。

はじめに

私が専攻する哲学の世界では、二十世紀、とりわけ二十世紀後半に入ると、近代哲学の解体という共通の課題を背負うようになった。そうせざるをえなかった理由には、次のようなことがあった。いくつかの例外を除いて、近代以降の哲学は、さまざまな立場から未来の人間の解放を約束した。人間の理性、知性、科学、進歩、歴史、合理性といった言葉が、未来の人間の解放のために動員された。

ところが二十世紀に入ると、哲学は自分たちが語った解放の物語が虚構だったのではなかったのか、ということに気づきはじめる。もしかすると近代哲学は、他者を支配する論理を内部にもっていたのかもしれない。人間が自然を支配する論理。他者の労働を支配する論理。人間が人間を支配し、文明が文明を支配する論理。それらのものが、近代的な理性や知性、合理性、進歩といった観念のなかにはふくまれていたのではなかったか。哲学的な考え方のなかに、根本的な欠陥があったのではないかと哲学は考えはじめたのである。

それは哲学的な認識の方法に反省をもたらした。はたして、われわれは十分にものごとを認識することができていたのだろうか。それだけではない。近代的な認識方法を確立することによって、その方法ではみえない「世界」を不可視の領域に追いやってしまったのではなかったか。私たちは、それを認識だと考える観念に支配されていただけであって、実際には何も認識できていなかったのかもしれない。

最高段階に知性を置く生物進化のとらえ方が、生物の生命をみえないものにしてしまったのではないかとベルクソンは述べた。認識を知性の領域に閉じこめてしまった、精神と身体との二元論が、認識不可能な「世界」をつくりだしているのではないかとメルロ・ポンティは語った。進歩という観念が、われわれの認識を邪魔していることは明らかだった。そのようなさまざまな反省が二十世紀に入ると次々にうまれてくる。

その反省は、実証的な科学に対しても向けられた。実証的な認識自体が、非実証的なかたちでしかとらえられない「世界」を、認識不可能なものにしているのではないか。科学的方法が、科学の対象になりえない「世界」を認識の彼方から消滅させてしまったのではなかったか。

本稿のテーマに即して述べれば、日本の歴史における自然と労働の役割を考察する前に、自然をどのようなものとしてつかむのか、労働を考える方法とは何かが問題だったのである。私の表現を用いれば、自然はどのようなものとして存在しているのか、労働はいかなるものとして存在しているのかを哲学は解かなければならなかった。とすると、存在するとはどのようなことなのか。

そのような問題意識をもちながら、私は舞台を群馬県の山村、上野村に移そうと思う。そこは1970年代に入った頃から私がヤマメ釣りのフィールドにしている村でもあり、75年頃からは2アールの畑を耕すようになった村、そしていまでは東京と村の家を往復しながら暮らすようになったところである。現在の私は村にいるときは、戸数8戸の小さな集落に暮らし、5アールの畑と50アール程度の山林を使い、川で釣りをしてる。

といっても、この村に通うようになって30年近くがたつというのに、私はこの村でいかなる調

査もしたことはない。つねに暮らしていただけである。そして、そこにはいくつかの理由がある。

そのひとつは、対象を観察するという方法に対して、私が懐疑的だったことである。対象の観察とその意味の分析という近代的な知の作法を私は哲学の方法としては拒否していた。私がとってきた方法は、そこに暮らすことによって、つまりそこにある関係性の網のなかに自分が組み入れられることによってみつけだされていく自然であり、労働であり、村であり、現代社会や人間だったのである。

だから私は、自然や労働の意味を問うこと自体も拒否しようとしてきた。なぜなら、その意味を問おうとする主体的意志は、その意志によって対象化されたものをつくりだしてしまうだろう。いわば、対象を観察するという方法は、観察者の精神へと自分自身を導き、近代哲学の誤りともいうべき主知主義へと私自身を誘うであろうし、また意味を問うことは、意味を問う主体が対象を措定させ、その措定された対象が対象として現実化していくという自己撞着からまぬがれられなくなってしまうであろう。

①……………自然の無事

私にとって必要なことは、上野村を舞台にしてつくられている関係の網に私が加わることであり、その関係の網が私に何をみせるか、つまり私が何をみせられていくのかだったのである。

上野村はその94%が森林という村である。この数字をみるかぎり、村人は自然のなかで暮らしている。しかし実際に村のなかで暮らしていると、自然のなかで生活しているという感じはしない。近代的な自然観と村人の自然観との違いが、このような相違を生み出すのである。

近代的な自然観においては、自然も人間も、それ自体としてひとつの実体であった。その結果自然と人間の関係は、実体としての自然と実体としての人間との関係になる。いわばひとつの実体である人間からみれば、自然もまたひとつの実体であり、客観的な存在である。ここにヘーゲル的に述べれば、自然と人間との自己疎外関係が成立する。それぞれが独立した実体である以上、人間にとって自然は対象化されたものでありつづけるだろう。人間にとって自然は客観的に認識するものであり、自然は認識されるものなのである。

このような自然観を前提にして、人間による自然の制御を考えたのが、近代の自然と人間の関係であった。それは人間による自然の管理から、人間による自然の征服へと向い、今日ではこの発想は、人間による自然破壊の原因をつくりだしたとして批判されている。その結果自然保護、あるいは自然と人間との共生理論が登場してくる。だがそれは人間による自然の制御の仕方の変更にすぎず、近代的自然観自体は変更されることなく堅持された。

ところが、上野村における自然と人間の関係は根本が違うのである。自然も人間も固有の実体ではなく、相互的な関係性のなかに自然が存在し、村人が存在する。

このことを説明するために、ひとつの話を記述しておくことにしよう。

上野村を流れる神流川は、毎年3月21日にヤマメ、イワナ釣りの解禁をむかえる。1970年代後半のある年の解禁日、私は竿を持って川に降りていったものの、寒さにまけて、早々川から上がってきた。年によっては解禁日は河原に雪が残り、河岸もまだ凍りついている。

川から帰ってきたとき、道に出たところで近所の村人に会った。「どうだった」「釣れなかったけれど、寒いから今日はやめた」というような会話をすると、その村人は、「それはいけない。もう一度釣りをするべきだ」と言う。「こんなに寒いだから、また明日にするよ」と言うと、村人はなおも「それはよくない」と言い、なおも私が抵抗していると、「それでは俺も一緒に行くから」と言って家に戻り、村人も竿を出してきた。私は仕方なく彼について河原に降り、後からその村人の釣りをみていた。

なぜ今日は、その村人がこんなに頑張るのか不思議だった。いつもは、おだやかな笑いをたやさない村人なのである。

ほどなく、その村人は小さなヤマメを釣った。8 cm くらいのヤマメで、15 cm 以下のものは川に戻すのが釣り人のルールである。村人は川に手を入れ水で冷やすと、ヤマメを釣りからはずし川に放した。特に春先のヤマメは乾いた温かい手でさわると、再放流しても病気にかかりやすくなる。

そのヤマメを川に戻すと、村人は「じゃあ帰ろうか」と言う。私はまた不平を言った。小さなヤマメを1匹釣って、放す。そのために何で寒い思いをしなければいけないのか。すると村人が私に説明した。「解禁日の釣りというものは、魚の顔を見るものなんだ。魚たちも冬を過ごして無事に春を迎えたということ、ちゃんと確認してこなければいけないのだ」

この話から私たちが感じることは、魚たちの無事の確認をとおして、川の無事、川を包む森の無事、そしてそれらの無事に支えられていま自分の無事があることを確認している村人の姿である。実際村では、自然が無事であること、村が無事であること、私もしくは我家が無事であることは同じ時空のなかに成立するばかりでなく、お互いが相互的な関係を形成している。自然と人間はお互いに他者なのではなく、相互に関係し合うことによってそれぞれが存在する。

それが自然に対する村人独特の表現をつくりだす。たとえば秋に茸狩りに行ったとき、伐採されて無残な姿になった森をみたときは、村人は「山が悲しげだった」と表現する。逆に秋の陽を浴びて紅葉した明るい森がひろがっているときは、「今日の森はとっても楽しげだね」とか、「今日の山は華やいでいるね」と表現する。つまり自然の状態を観察者の視点で表現するのではなく、そのような状態にある自然の感情であらわすのが、村の流儀である。

自然保護が、お互いに他者である自然と人間が結ぶひとつの関係のあり方であるのに対して、自然の無事は、相互性のなかにそれぞれの存在があるような状態を示しているのである。自然の無事では、自然も人間も、固有の実体として措定されてはいない。自然の無事が人間の存在の要素であり、同時に人間の無事が自然の存在の要素である。つまり自然は観察され、関係を結ばされる他者ではなく、自分の存在のなかの一部なのである。

だから上野村にいと、自然のなかで暮らしているという感覚は芽生えない。なぜなら自分の存在は、自然とともにつくられているのであって、他者としての自然に包まれて暮らしているわけではないからである。

それを、自然と人間の交通のなかに自然が存在し、人間が存在するといってもよいだろう。自然と人間という実体がまず成立し、次に両者の間に交通が成立するのではなく、自然との相互的な交通によって、自然が存在し、人間が存在するのである。

ところがこのような存在のあり方は、この交通の内部にいないかぎり確認できない。交通の内部

にいるとき、自分の存在はそのようなものとして、みせられていくのである。それは観察されるものではなく、諒解していくものである。

すなわちこの自然観や人間観には、客観的で普遍的な真理があるわけではない。合理的に論証することも不可能である。それは山村の、しかもある歴史をもつ山村のなかに成立している自然と人間の交通を共有する人々にだけ諒解できる存在のあり方である。

②……………共同体における交通と自然

私がつかもうとしている自然とは、このようなものであり、近代的な自然観が提示したような自然ではない。そして日本の歴史に影響を与えた自然とは、このような自然だったのではないだろうか。なぜなら自然と人間の交通の内部にいる人々が、その交通をとおして成立していく自己の存在を基礎にして、暮らしと歴史をつくっていったのが、日本の社会史なはずだったからである。

ところがここで用いた「交通」という言葉は、近代市民社会を近代的な交通の社会としてとらえようとした J.S. ミルの方法から借りてきたものである。アダム・スミス以降の古典経済等にあつては、市場経済を市場を媒介にした交通によって成り立つ経済としてみる視点が、萌芽としては生まれてきていた。

しかし私が自然と人間の交通という言葉で語ろうとしているものは、近代市民社会や市場経済の論理ではない。そうである以上「交通」について、もう少し記述しておく必要があるだろう。

私は、われわれの暮らす世界は、3つの交通によって成り立っていると考えている。自然と自然の交通、自然と人間の交通、人間と人間の交通の3つである。ここでの交通とは、互いに結ばれながら相互に影響を与えあっている、というほどの意味であるが、生態系的な世界である自然と自然が交通する世界と違って、自然と人間、人間と人間の交通には、本質的な「あるべきかたち」が成立するわけではない。このふたつの交通は、人間によって生みだされ、発見されるものである以上、現実的な交通としてつねにつくりだされているだけである。

たとえば前記した解禁日における魚の無事をめぐるとの話は、魚と人間とのひとつの交通の世界を示している。村人は春を迎えた魚の無事を確認することのなかに、魚と人間との交通をつくりだし、この交通をとおして無事な自分の存在を発見している。

しかし、それが川魚と人間との本質的な交通のあり方なのかと問われればそういうことではない。第一にこの交通のあり方は、あくまで川の流れる山村に暮らす村人に成立しているものであって、たとえば解禁日に数多く姿をみせる村外の釣り人のものではないだろう。そればかりか、第二に、この交通はすべての村人のものでもない。釣りをする村人は山村でも少数である以上、この交通は釣りをする村人だけのものである。

つまり、そのように係わるから、そのような交通が生まれるだけであつて、けっしてある種の交通が本質だということにはならない。人間がからむ交通には、係わるという働きかけが必要である以上、係わり方が多元的であるように、交通も多元的なのである。

とともに、この係わるという行為には、しばしば係わりに必要な技が求められる。たとえば前記した魚と人の交通には、釣りの技を欠かすことができない。

それ以外の自然と人間の交通でも同じことである。たとえば森林と人間の交通をみても、森林を利用し、逆に育成する技の何をもっているかによって、森林への係わり方は変わってくるし、森林と人間の交通のあり方も変わる。

山村では、このような交通が、森林や魚や川を、つまり自然を発見させる。自然はあらかじめ存在する実体ではなく、交通によって、さらに交通を成立させる技によって、みつけられたものとして存在するのである。

さらに私は次のことを指摘しておこうと思う。近代の思想はデカルトに象徴されたように、精神と身体との二元論から出発した。現代哲学はこの統一をめざしているが、われわれの暮らす風土では、このようなことに悩む必要はない。なぜなら、私たちが自然や他の人々に働きかけるとき生まれる技は、もともと精神と身体との分離を不可能にしていたのであり、技は精神の働きであり身体の働きであった。とすると、技をとおして生まれる交通のなかで発見される自然や他の人々は、精神によってみつけだされたものであり、同時に身体をとおしてみいだされたものであることは、われわれの暮らす風土では、改めて話題にする必要もないことなのである。

それが技のもつひとつの面であるとするれば、もうひとつの面は、技が、技の蓄積や技の継承と不可分なかたちで成立するということである。つまり技は経験をとおして蓄積していくものであり、また、その地域の技を継承するところからはじまる。

それを技のなかに内包された歴史と表現してもよいだろう。個人の歴史としての蓄積とその地域が技としてつくりだした歴史の継承が、技のなかには包みこまれている。だから別の表現をすれば、技は個人の歴史の記憶と、その地域の歴史の記憶とを、その内部にもっているのである。

とすると、次のように述べてもよいだろう。技が交通をつくり、その交通が交通対象である自然や他の人々を発見させるならば、その発見には、歴史の記憶によってみいだされるものが必ずあるはずである。すなわち私たちは自分の技を用いて交通をつくり、その交通のなかにある、たとえば自然を発見していくのであるが、それは一面では歴史の記憶にもとづく自然の発見であって、決して「私」の力だけによる発見ではない。

「日本の歴史における自然と労働の役割」という課題における「自然」とは、自然科学的に解析された自然ではなく、このような自然である。つまりそれは、近代社会が生まれる以前においては、共同体の歴史や記憶とともにある自然であり、その歴史や記憶を内部にもつ技の継承によってみつけだされる自然だといってもよい。その意味で、自然は地域的なローカル性を離れることができないのである。

③……………存在する共同体について

ところで、ここで私がフィールドにしている群馬県上野村について、少し説明しておこうと思う。上野村は、長野県、埼玉県との県境に村境があり、山梨県とも接するほどに近い西上州の山村である。村の中心に利根川の支流神流川が流れ、はじめに述べたように村の94%を森林が占める。村に水田は一枚もなく、ほとんどの畑は傾斜している。神流川沿いに5つの大きな集落があり、それ以外の小さな集落は谷や山の中腹に点在している。1999年の時点で人口は約1,700人の村である。

このように説明すると山間の寒村のように思われるかもしれない。だが実際にはそうではない。村を貫くように、かつては中山道の裏街道十石峠街道が通っていた。中山道はいまの碓氷峠付近が難所だったこともあって、物質の輸送量は、一時期中山道よりも十石峠街道のほうが多かった。信州との国境である十石峠から下りてきた最初の集落に関所があり、江戸時代は村は天領であった。

この村の特徴は、食料の自給ができないほど農地が少ないことと、大きな街道があったことにある。その結果村人は昔から商品生産に精をだし、米を買うという生活をしてきた。街道を伝ってくる情報だけでなく、ときに村人は気軽に江戸へ出て情報を集め、そのときどきの有利な商品をつくりながら暮らすという生活をしている。江戸時代の代表的な産物は生糸と和紙であったが、村人はそれだけに頼っていたわけではなく、つねに多様な商品生産に従事していたのである。広大な森林は、そのための基盤でもあった。

この伝統はいまでも残っている。つまりこの村は、閉ざされた山村という雰囲気ではなく、開かれた山村という空気を漂わしているのである。

私が1年の3、4ヶ月を暮らしている上野村は、このような村である。といっても、哲学にとつては、このような説明はほとんど意味がない。哲学にとっての関心は、上野村というひとつの共同体が、私に何をみせたかである。より正確に述べれば、私と上野村との交通のなかで、共同体はどのようなものとして存在していたのか、である。

もっとも、このような問いを発するならば、はじめに私と上野村との交通の変容について述べておかなければならないだろう。なぜなら私と上野村との関係は一貫して同じものではなかった。そしてその変化が、みえてくる共同体を変えていった。

最初の2、3年は、私はこの村を訪れる釣り客であった。釣り客と村の関係以上の交通をもっていなかった。その結果、このような交通のなかでは、上野村は私の暮らす東京とは労働や生活の仕方、習慣などの異なる異文化としてみえていた。確かに村の労働や習慣は私に大なる関心をもたせ、ときに感心させてはいたが、それもまた東京との異文化性においてにすぎない。

ところが、村人にすすめられて畑をつくりだしたことによって、私と上野村の交通は大転換をとげる。もちろん畑といっても、少し広めの家庭菜園程度のものである。ところがその程度のものであったにもかかわらず、このときから私は村の農地との間に交通を結びはじめたのである。

重要なことは、それが単なる大地でも土地でもない村の農地だったことである。つまり、村の農地は、けっして、単なる土地ではなかった。

村の農地は、第一に森との連続性のなかにある。その結果農地との関係は、たちまち森との交通を、しかも畑と結びついた森との交通を成立させる。第二に村の農地は集落のなかの一部である以上、集落との交通を発生させる。とともにその集落も農地も歴史を記憶している。ゆえに第三に、集落の歴史との間に交通がつくられはじめる。そして、それらの結果は、畑を耕やすという村の営みの共有をとおして、上野村の人々との交通を発生させたのである。

こうして東京の人間でありながら、疑似的には村の営みを共有している人間として、半村民的な共同体との交通が成立した。私は半面では、東京の人間として外部から村をながめ、半面では村の人間として内部から村を発見していくようになった。

その後、私は村の農家を購入し、ひとつの集落の一員になっていく。といっても生活のかたちは

さほど変わらず、村にいるのは1年の3、4ヶ月ほどにすぎない。多少の変化といえば、農地が少し広くなったことと、わずかな山林を所有するようになったことぐらいである。

ところが、このときも私と村の関係は大きく変わった。村人がこのような私の変化を歓迎してくれたのである。それは村人の私への交通を変え、そのことによって私と村との交通も変わった。私は半村民のまま、村人のように振る舞うようになった。

このような交通の変化のなかで、共同体は姿を変えながら私の前に登場してきた。共同体は客観的で社会科学的分析が可能な実体として存在しているわけではない。つまり、固有の実体として存在しているものではないのである。それは交通のなかでみえてくる存在である。だから交通の変容が、みえてくる存在としての共同体を変化させる。存在するとは、関係のなかに、事実そのようなものとして展開している、ということである。

だから、共同体の普遍的な真理があるわけではない。もちろん私たちは、合理的に共同体の構造を説明することはできる。しかし、そのような構造として、共同体が存在しているわけではない。なぜなら存在は交通のなかに展開しているのだから。

にもかかわらず、これまでの社会科学では、共同体を構造的に分析する理解が中心でありつづけた。なぜそれが可能だったのだろうか。それは社会科学の担手たちが、近代的学問の手法に忠実に、学問的視点から共同体を観察するという共通の方法をもっていたからである。すなわち意識されないうまに、観察者たちは、共同体との間に、共通する交通を確立していたのである。それが同じ土俵の上での議論を可能にさせた。

もちろんこの交通のなかでも、共同体はその姿をあらわす。ただし、この交通のなかに姿をみせる共同体をもって共同体の真の姿だと考えるなら、ここにあるものは誤謬だけだろう。共同体は、自然もまたそうであるように、交通のなかでみつけられるものであり、ひとつの実体ではなく、さまざまな交通のなかに多層的に存在するものなのである。

④……………共同体的交通の性格

とすると、ここで必要な問いかけは、上野村という山村の共同体が、私の前にどのようなものとして姿をあらわしているのか、であろう。この問いに対して、私は半分は共同体の内部にいる人間として答えていこうと思う。

私は村の共同体を、共同体内的な交通と、共同体の外との交通の重なりの中かにみている。つまり、そのようなものとして、村の共同体は私の前にあらわれている。

共同体内的な交通としては、村の内部での自然と人間の交通、人間と人間の交通があり、それらは全体として循環系の交通をつくりだす。この循環系の交通のなかに、前記した無事な世界が生まれるのである。

ところが村はけっして、共同体内的な交通だけによって成り立っているわけではない。つねに共同体の外と交通してきた。とりわけ上野村のように耕地が少なく、食料の自給ができない村では、食料を買う必要性もあって、商品生産は欠かせないものであった。そして、ここに発生する商品経済を街道が支えた。といっても、外部との交通は上野村だけに特有なものではなく、どこ个村でも

共同体内的な交通と外部との交通の重なり合いのなかに村は成立していたと思われる。

ところでこのふたつの交通は、機械的に分けられるものではなく、しばしば複雑にからみ合っている。そのことを説明するために、ある話を記しておこう。

上野村の山にはイワタケという茸とシノブがよくはえる。イワタケは茸といっても正確には地衣類に属する一種のカビで、石灰質の岩に黒く張りついているものである。それをはがして採取し、食用にしたり、漢方薬用に売ったりする。シノブは江戸風鈴によく使われた蔓で、これもイワタケと同じようなところにはえている。

上野村の山は立木以外は共有という原則がいまでも守られており、茸や山菜と同じように、イワタケやシノブも、自分の持山でなくとも採取することができる。とともにイワタケとシノブは換金可能な採取物で、村にはときどき仲買人が姿を現わし、家々を回って買っていく。

その金額は、けっして少額ではない。たとえば夏に大人が1日山々を回ってくると、3万円から5万円程度のイワタケ、シノブを採取することができるし、危険な場所にロープを下げた採る方法では、1日に30万円分ほどを採った人もいる。

つまり、イワタケは少量は村の暮らしのなかで食用として消費されるというものの、シノブもイワタケも換金される採取物として、外部との交通のなかに組み入れられていくのである。しかもそれは、誰の山から誰が採ってもよい。

ところが、それなら誰もが採取に熱中するかといえば、そうもいかない。というのは、イワタケもシノブでも採りつくしてしまえば再生に長い時間がかかり、うっかりすると根絶してしまいかねないのである。その結果、自分の家で食べるくらいはよいとして、大量に出荷するために採るには、村人の暗黙の諒解が必要になる。といっても、イワタケ、シノブの採取法についての取り決めはなく、慣習としてあくまでも暗黙の諒解である。それは、その家がいまお金が要る事情がある、ということで、たとえば家族に入院している人がいるとか、子供が大学に行っていてお金が要るとかというようなことがあって、はじめて村人はその人が大量採取することを容認するのである。この場合、村人に説明し、諒解をえる必要はない。Aさんが山に入っている。そういえばAさんにはこういう事情があったなあ、というような感じで、村人は諒解していくのである。この諒解がえられないようなケースで大量採取をすると、取り決めはないから何らの制裁が加えられることもありえないが、村の無事をこわす人とみなされ、その人は発言力を失っていくことになる。

イワタケとシノブはこのようなものであり、つまり村人にとっては共有された保険のような性格をもっているのである。

この事例でわかるように、共同体の外との交通も、ときに共同体内的な交通によって制約される。共同体内的な交通は、村の持続を前提にし、それゆえに循環系の交通、無事を守るための交通としてつくられ、この交通が、持続の共有を保持していない外との交通に制限を加える、といってもよい。

とともに、この事例は、共同体内的な交通のルールが、慣習として、あるいは村人の記憶としてつくられていることを示している。ここで、私が上野村に行きはじめた頃の話をもうひとつ書いておこうと思う。

その日、暗くなった頃に私が川から上がってくると、道端で村人に会った。立ち話をしているう

ちに、私はその村人に一仕事頼まれることになった。簡単な事で、少し離れた集落のある家に大根を届けるので、私が運転手をするという用事である。その村人は当時、車をもっていなかった。

私は彼と大根を車にのせ、目的の家に行った。そして戻ってきた。帰りの車の中には、その村人と、彼が大根を届けた家からもらった豆類などがのっていた。

ところが、それからが長かったのである。その村人は大根を届けたお返しに豆類などをもらってきた。それで終るのかと思ったら、翌日に、今度はお返しのお返しに行くという。相手もそうするだろうと推測していたらしく、その家には、お返しのお返しのお返しが用意されていた。そしてまた翌日は、お返しのお返しのお返しのお返し、である。「どのくらいつづくの」と聞くと、村人は、「今回だと7回くらいかな」と言う。

この場合も、もちろんお返しの取り決めがあるわけではない。にもかかわらず、村に暮らしてきた人々には、今回は何回くらいつづく、ということが暗黙のうちにわかるのである。もちろん、もっと回数が少ないときもある。そのときは7回と長かったのは、晩秋の野菜が採れる時期だったことが関係している。山間地の村だから、集落によって野菜の出来、不出来が激しい、ある野菜はA集落では豊作、B集落では不作、他のある野菜はその逆になるというようなことは、しょっちゅうである。気温も、雨の降り方も、陽のさし方も、集落によって驚くほど違い、山村ではそれが作物に決定的な影響を与える。

つまり、このときのお返しは、集落間で豊作のものを交換し合い、結果的に作柄を平均化させる役割を担っていたのである。そして、お返しを受けた家は、それを集落の人々に少しずつ配り、ここでも小さなお返しが、何度も何度もくり返されていった。こうして、最終的には、家々の作柄が平均化された。

この事例でも、共同体内の交通を生みだしているものは、いかなる取り決めもない村の慣習であり、村人の記憶なのである。

⑤……………「仕事」と「稼ぎ」

私には共同体はこのようなものとしてみえている。私との交通のなかで、共同体はこのようなものとして姿をあらわしている、といってもよい。

ここで私は、もうひとつ村の話を書いておこうと思う。それこそが村の共同体の基層にあるものだという気が私にはするからである。

上野村で畑を耕やすようになった頃、私は村人の言葉づかいに感心したことがあった。あるとき村人が言った。「これから仕事に行ってくる」。またあるとき村人は言った。「これから稼ぎに行ってくる」

私が感心したのは、「仕事」と「稼ぎ」というこのような労働の使い分けである。特に意識することもなく、村人はこのふたつの言葉を使い分ける。

何を「仕事」と呼んでいるのかというと、村の循環系のなかに成立している交通とともにある人間の働きがそれにあたる。たとえば畑仕事、山仕事。それらは自然と人間の循環的な交通のなかにある労働である。そして寄合いとかが、この村ではオテンマと呼ぶ「結」としての共同労働、さらに

助け合い、病人の世話に行く。そういった循環系のなかの人間と人間の交通も「仕事」である。それは村に暮らす人間が引き受けなければ村の持続と循環が維持できなくなる、そのような労働のことである。

それに対して「稼ぎ」は、文字どおり、稼ぐということ以外には動機がみつからないような労働である。それは共同体を維持する循環的な交通とは関係のない労働であり、しなくてすむのなら共同体の暮らしにとっては必要のない労働である。今日の「稼ぎ」の代表的なものは、土木工事の労働であり、江戸時代には街道の荷運びがその代表的労働であった。

ところが実際には、もっと微妙な境界線がある。たとえば、循環的な営みのなかで畑を耕やすことは「仕事」であるが、農業経営の計画にしたがっておこなわれる農業は「稼ぎ」になる。もちろん「仕事」の結果が収入になることは全くかまわない。だが収入を目的として労働が投下されるときは、その労働は村の循環系の交通からは離れているのであり、他に十分な収入があるのならしなくてもよい「稼ぎ」なのである。

山の労働にも同じような使い分けがでてくる。山の木を育てたり、炭を焼いたり、大きくなった木を伐倒して出荷することは「山仕事」に入るが、そのときの出荷は、あくまでこの村に暮らす人間として木を育てつづけた結果でなければならぬ。だから、同じことを林業経営の論理にもとづいておこなえば、それは山での「稼ぎ」に変わる。

「うちの息子はいま東京に稼ぎに行っている」。こういう話を村ではよく聞く。この場合は、上野村の表現としては、東京に出稼ぎに行っているわけではない。学校を出て就職し、結婚して東京で暮らしているケースがほとんどである。しかしこの場合も、息子の労働は村の循環系の交通のなかにあるわけではないから、村の判断としてはあくまで「稼ぎ」なのである。

つまり村には、「仕事」を生みだしていく交通と、「稼ぎ」を生みだしていく交通とがある。このふたつの労働が、慣習のなかで、意識的に分けられているのは、次のような理由があったからではないかと思われる。

すでに述べたように、上野村は自給自足が困難な村である。いまでも村人は、自給自足に近い生活を強いられた戦中戦後の一時期が、どれほど苦しいものであったのかを語ってくれる。

このような村の性格を考えると、上野村の人々は非常に古くから、商品経済とかかわりながら暮らしてきたのであろう。ときには村外に出稼ぎに行くこともあったはずである。つまり、この村は「稼ぎ」を必要とする村だったのである。だから、いまでも「よく稼ぎをする人」という言葉は、ほめ言葉である。

ところが「稼ぎ」に精を出しすぎて、「稼ぎ」以外のことをしなくなると村がこわれる。つまり「仕事」と「稼ぎ」のどちらかを否定するのではなく、両者のバランスを上手にとっていかないとどうまくいかなのである。「稼ぎ」を否定してしまえば生活が成り立たなくなり、逆に「仕事」を否定すれば村がこわれてしまう。

こうして村人は、「仕事」を「稼ぎ」より上位におく、しかしけっして「稼ぎ」も否定しない精神の習慣をつくりだしていったのではないだろうか。共同体の内部にある循環的な交通とともにある「仕事」と、それから離れ、ときに共同体の外部との交通と結びつく「稼ぎ」。この両者のバランスを崩さないようにすることが、上野村というひとつの山村の共同体の基層には存在しているのである。

⑥……………「広義の労働」と「狭義の労働」

このような共同体における労働の性格をみないと、日本の歴史に影響を与えた労働とは何かは、わからなくなってしまうのではなからうか。というのは、この労働観は、近代社会における労働観とは、あまりにも違うからである。

近代に入ると、労働は価値生産に結びつく行為だけに限定されるようになってくる。ここでいう価値生産とは、いうまでもなく、商品価値の生産であり、最終的には市場と結びついていくものである。もっとも明確なかたちで価値論をつくりだしたマルクスによれば、商品の価値は、その商品の生産に必要な労働時間によって決まるのであり、その労働時間とは、社会的な総労働の平均としての労働に時間を掛けたものであった。

つまり、社会主義思想もふくめて、近代の思想では、労働は商品の価値生産のための行為として概念化されたのである。そのとき、ヨーロッパ言語における労働の意味は、もともとは労苦とか苦役という意味であったという古代の労働観が甦った。なぜなら価値生産のための行為が労働であるとするなら、価値生産の主体を奪われた人間、すなわち労働者にとっては、労働は生活のために自分の労働力を商品として売る労苦にならざるをえなかったからである。

こうして、労働は価値生産の領域だけに限定され、それ以外の働きには別の概念が与えられるようになった。生活、奉仕、趣味、……。ここに近代的な労働と生活のかたちができあがったのである。

このような労働観をもとにしたのでは、共同体の人々の姿はみえない。にもかかわらず、生産物の生産に労働があり、その生産物の搾取によって苦しい生活があると説いたのが、かつての近世社会論であった。近世の人々の暮らしが苦しかったのか、それとも最近では通説化しはじめているように案外豊かだったのかは、ここでは問わない。かつての説の問題点は、近代に入って成立した労働観、あるいは労働と生活のとらえ方にもとづいて、近世の労働をとらえてしまったことにあるのである。その結果、近代思想がつくりだした合理性によって、共同体の人々の労働と暮らしが説明されるという問題点が生みだされてしまった。

ところが、今日でもなお、上野村の人々が記憶し、伝承させ、慣習のなかに組み入れてきた労働の世界では、価値生産に結びつかない労働が大きな役割をはたしているのである。価値生産と結びつかない、共同体内の循環系の交通とともにある労働が、共同体を維持させてきた。

このような交通のなかに半分参加するようになったとき、私は、近代的な労働観を捨てる必要性に迫られた。なぜなら私の前にあらわれてきた労働の世界は、そういうものではなかったからである。

この頃から私は「広義の労働」、「狭義の労働」という言葉を好んで使うようになる。かつての労働は、今日私たちが観念しているものより、ずっと広いものだったのではなかったか。現に上野村の「仕事」のなかには、価値生産と結びつかない、今日的にいえばボランティアのような仕事も、家事のような仕事もある。人々はときに稼ぐために労働をし、村の営みのなかで労働をし、暮らしのなかで労働をしてきた。そこでは、価値生産とは違う何かがつねに生みだされてきた。このよう

な労働を私は「広義の労働」と呼び、それに対して「稼ぎ」としての労働—今日では価値生産と結びついた労働を「狭義の労働」と呼んだ。したがって、「広義の労働」と「狭義の労働」は対立概念ではない。「広義の労働」の一部として「狭義の労働」が成立しているのである。

このような労働の世界を、村の共同体は私にみせたのである。みせられることによって、私はこのような労働の世界を発見した。

もっとも今日では、ポランニーの理解や、「モラル エコノミー」の理論にみられるように、非市場経済的な労働の役割を評価しようとする動きも生まれている。しかし私は、市場経済、非市場経済という分け方を必ずしも納得していない。なぜなら、経済学の立場からは、これまで経済学が研究対象にしてきた市場経済だけで経済社会は成り立っていないことの発見は、新鮮な発見であったかもしれないが、それはあくまで経済学の観点からみつけられたものであって、人間の営みの視点からとらえれば、市場経済と非市場経済は分離不可能なほどに、複雑にからみあっているからである。

たとえば村の農業をみれば、「稼ぎ」としての農業は市場経済と結ばれている。ところが「仕事」としての農業も、結果としては販売され、市場経済と結びついていくこともあるし、非市場経済のなかで利用されていくこともある。そのどちらになるかは偶然性に大きく影響されることもあり、たとえば豊作なので出荷するとか、贈答用に用いる予定がなくなってしまったのとか、いわば循環的な交通からはみ出してしまったものが、市場経済に回されたりするものである。

循環的、持続的な交通のなかで労働がおこなわれているのか、それともその外に交通が成立する労働なのかが重要なのであって、市場経済、非市場経済はここでは指標にはならない。「広義の労働」とは市場と結びつく労働も、結びつかない労働もふくめて展開される労働であり、この労働のある部分が市場経済と結ばれていく、しかもどの労働が結ばれていくのかにはしばしば偶然性が介在し、その全体のなかで共同体の営みがおこなわれていくのである。

このような労働が可能になる条件に、山村を支えた交通の厚みがあった。共同体内の循環的な交通と、共同体の外との交通。共同体の外との交通は、上野村では西上州の地域だけではなく江戸ともつながり、この交通の厚みのなかで情報が行き交い、労働のある部分が突然市場経済と関係をもちはじめたりする。私が村を訪れるようになってからも、ある年の年末に松飾り用の松が突然商品になり、それは一年で終り、また数年間ゲンノショウコなどの薬草が商品になり、最近でもなぜか正月用のウグイの白焼が高値で取り引きされたりというように、この山村の性格は細々となってきたとはいえ、今日なお失われてはいないのである。

①……………労働に対する「精神の習慣」

ところで、労働とは何なのだろうか。前記したように近代社会は労働を価値生産と結びつけ、そのとき労働は労苦であったという古代の労働観を甦らせている。しかし私は、この労働観では、共同体の営みや日本の社会史をとらえられないと述べた。とすると労働とは何か。

はっきりしているのは、労働は概念にもとづいてつくられたものではない、という当り前のことである。概念がつくられる前に、労働はおこなわれていた。

とすれば、労働をどうとらえるのかは自由なのである。労苦でもよし、私のように多面的な交通のなかにそれをみてもよい。つまり、ここでも問われていることは、労働はどのようなものとして、私たちの前にあらわれているのかであり、そのあらわれ方は、労働によって展開されていく世界とく私との交通のあり方によって変わる。

とすると、各時代、各社会における労働観を相対化することはできないのだろうか。私には、ひとつの方法だけがそれを可能にするように思われる。それはかつてトクヴィルが『アメリカの民主政治』のなかで使った方法であり、労働に対する人々の精神の習慣から労働をとらえる方法である。

トクヴィルは、19世紀初期のアメリカを旅行したとき、この社会には、勤勉に働き、富と名声を得ていくことが人間の使命であると考えた共通の精神の習慣があり、それ以外の精神の習慣をもたない危険性がこの社会にはあると述べた。このような精神の習慣は、我がフランスでは、恥ずべき出世欲、金銭欲とみなされているものだ、とも。

いわば、このような精神の習慣が、アメリカ的労働の世界を映しだしていたのである。

とすると、日本の労働観、つまり日本における労働に対する精神の習慣とは、どのようなものか。私は次のように考えている。

第1に、日本の精神の習慣には、労働を修業の過程としてとらえる一面がある。今日でも労働が技の向上や知恵、知識の蓄積をもたらさないとき、つまり修業を感じさせない労働は、日本人々には好まれない。技が向上する。判断力が増す。認識する世界が広がる。労働をとおして人間が成長していく。ということを感じさせるものとして労働をみる精神の習慣を私たちはもっている。

つまり日本の労働には、どこまで向上してもまだ先をめざす修業があるという一面が包みこまれている。とともに、ある程度一人前になったとき、今度は労働をとおした貢献を労働のなかに求める精神の習慣を私たちはもっている。自分の労働が何かに貢献できていることを求めるのである。

日本における労働に対する精神の習慣は、労働に修業と貢献をみる精神の習慣として成立しているのではないだろうか。そして、このような精神の習慣をつくりだしたものは、共同体における労働のあり方だったのではないかと私は考えている。

共同体における労働は、「稼ぎ」だけで成り立っているものではなかった。もうひとつ「仕事」としての労働があり、しかも「仕事」は「稼ぎ」よりも尊いものとされる。「稼ぎ」には、稼ぐための技の向上はあっても、そこには一定の合理的限界が設けられるものである。つまり、これ以上の向上は稼ぎに寄与しないと、自分の稼ぎはこの程度でよいといった自分なりの判断が生まれる。ましてや「稼ぎ」は稼ぐための行為であって、貢献するためのものではない。

ところが「仕事」となるとそうもいなくなる。「仕事」は自分で把握可能な関係の網、つまり自分の感覚でとらえることのできる自然と人間の交通、人間と人間の交通のなかでの働きである以上、利害や合理的判断ではなく、もっともよい交通をつくりだすことの方に目的がおかれる。もっともすぐれた自然との交通とは何か。もっともすぐれた人間との交通とは何か。ここから修業を感じさせる労働を求める意識が芽生えてくる。

しかもその労働は、暮らしてきた風土のなかで身につけたものである。そのような労働を身につけさせ、自分を育ててくれた村。自然。そして「家」。それらのなかで修業し技を継承してきた。とすれば、自分を育ててくれたものにお返しをする、お礼をする、つまり貢献することによって労働

働の役割をはたし、共同体のなかで認められていく。それが「仕事」の世界だったのである。

もちろん、貢献するといっても、具体的な貢献対象があるわけではない。それはときに村だったり、自然だったり、「家」だったりするが、実際にはそれらの全体としての風土のようなもの、つまり村のなかにつくられている交通の網のようなもののなかで貢献していくものであって、ここにも合理的な基準はないといえることができる。

ところが、このような合理性をもたない修業と貢献の内容は、共同体の交通を共有している人々には、明確なものとしてみつけだされているのである。修業と貢献も共同体内部の交通とともにある以上、その交通のなかで生きている人々が、その内容を見つけたせるのは当然のことである。しかし、その交通を共有しない者からみれば、その内容は非合理であり、不可視の領域につくられている。

⑧……………まともに代えて——記憶と歴史

労働に対する精神の習慣が、そのような労働を存在させていると言ってもよい。といってもその精神の習慣は、暮らしとともにあるさまざまな交通のなかで芽生えてくるものであり、つまり交通を軸にして、一方に精神の習慣が生まれ、他方に労働が成立すると考えればよい。

そして、このようにみてきたとき、本稿で最後の課題になるのは、この交通と歴史、あるいは記憶との関係ではないかと思われる。あるいはそれを、共同体にとって歴史とは何かと表現しなおしてもよい。

一般的に述べれば歴史とは、太古から現代に至る時間軸のなかで語られてきたものである。そこには生物の進化の歴史をみつけだした自然科学の手法が導入されている。生物に進化時間軸があるというアリストテレス以来の観念が自然科学の台頭と結びつき、この手法の導入が人間の進化の歴史という観念を生み出したのである。その道具となったのが啓蒙主義的な実証主義であり、合理主義であった。歴史は時間軸にそって合理的に検討され、実証的に研究されるものになった。

ところが村の共同体のなかにいると、歴史はそのようなものとしてみえてこない。共同体においては、歴史は現在の自分たちの存在を確認する記憶であり、自分たちの存在を発見するための物語として、共同体のなかにあるといったほうがよい。

ここでは歴史の時間軸は意味を失っている。歴史は時間的な変遷ではなく、共同体とともにあるひとつひとつの事象の意味や役割を教える記憶や物語として、星座のように広がっているのである。

それぞれの「家」には、その「家」に伝えられた記憶と物語がある。ひとつずつの集落にも、その記憶と物語がある。畑にも、木にも、森にも、川にも、そして村やときに一人一人の人間にも、そればかりでなく、その労働が「仕事」と呼ばれ、あの労働が「稼ぎ」と言われる理由にも、村のなかには展開しているさまざまな自然と人間の交通や人間と人間の交通にも。

この記憶や物語は、過去の事実とはくい違っているのかもしれない。しかし、それは問題ではない。共同体の人々にとって必要なものは、過去の事実の知識ではなく、現在の自分たちの営みや存在の理由を説明してくれるものだからである。つまりそれは現在を照しだす「過去」である。そし

て、その記憶や物語が、現在に意味や価値を与えてくれるかぎり、共同体の人々はそこに「真理」をみだし、そのようなものとして「過去」は確実に存在している。

この歴史観を、歴史と呼ぶべきかどうかを私は知らない。はっきりしていることは、この歴史観を社会が承認しなくなったとき、共同体は抑圧されていたということである。そして私は、歴史哲学は歴史学ではないということだけを書き添えておくことにしよう。歴史哲学は、そのような歴史観がつくられた根拠を問う学問である。

そしてこのようにみていくとき、自然と人間の交通のなかで発見されていく自然にも、自然と人間の交通や人間と人間の交通のなかでみえてくる労働にも、記憶や物語としての「歴史」があるのだということに気がつく。その「歴史」が自然や労働に意味や価値を与える。そのことに支えられて、共同体の人々は存在している。

日本の歴史における自然と労働は、この世界のなかに展開していたのである。

(国立歴史民俗博物館共同研究員)

(1999年7月6日 審査終了受理)

Methodology of Study on “Nature and Labor”: Through the Case of Ueno Village, Gunma Prefecture

UCHIYAMA Takashi

In the traditional Japanese way of thinking, Nature was not perceived as an object which lies outside the human being. It was rather supposed that Man and Nature were interacting with each other. People thought Nature was part of the existence of Man, while Man was part of the Natural activities.

It has been thought that community and labor existed in order to realize this relationship between Nature and Man. Labor was not merely considered as a means of production but also as essential for building man's life and maintaining the community. It is, in other words, involved in every interaction with nature.

With this viewpoint, this essay explains how Nature and Labor have influenced Japanese history. And it discusses the subject that can unify what is rational and what is irrational, specifically in the arts (waza), customs, memories, legends, etc.